掲示板

東京天文台助手公募

東京天文台では天文時部門の助手一名を公募します．応募資格は大学院修士課程修了者．応募者は履歴書，論文リスト，論文別刷のほか研究上の抱負をしたためて〒181　三鷹市大沢 2-21-1，東京天文台長あて**昭和51年6月21日**までにお送り下さい．封筒に「助手応募書類」と朱書のこと．

東京天文台長　大沢清輝

書評

星の物理

北村正利著

（東京大学出版会，B 6 版，Ⅻ＋253頁，900円）

天に二日なく……とかいう言葉を昔教わったが，それは太陽系の話で，広い世の中には，二日も三日もあるような世界がいくらもあり，連星系とよばれる．そこには惑星がまわっていて，天の二日を眺めている生物もいるかもしれぬ．遠い星のこととて惑星を直接見ることは出来ないが，間接的証拠で不可視伴星の惑星的存在が考えられている系もある．太陽の近くにある星を調べてみると大体半分は連星だという．第Ⅶ章には明るくて有名な星々がとりあげられて説明されているが，連星が多いのに驚かされる．最近20年間，観測手段の拡大に伴ない，天文学の進歩は著しいものだが，パルサーとか，ブラックホールとか，X線星とか，重力波とかそういう話題はみな連星に関連がある．新聞をにぎわした話題で連星と関係がないものの方が少ない位である．

この本は序文にあるように変光星や連星の章に重点が置いてある．第Ⅰ章：星の宇宙と銀河，第Ⅱ章：星の一生，第Ⅲ章：星の構造，ここまでに全般的説明が与えられている．題名から星より大きい単位の話はともかくとして，“星の物理”の一般的な話を期待したむきには物足らないかもしれない．第Ⅳ章：変光する星には要領よく各種変光星の紹介がある，頁数の割合に多くのことが書いてあるので，変光星の物理としては，やはり物足りない感がある．第Ⅴ章：連星は次の章への準備もかねてよくまとまっている．準備という意味ならば，次に第Ⅶ章：星座の星を読むのもよいだろう．章末の１等星の表も含めて，明るい星々の具体的な物理量，特徴などが表になっていて，単なる星座案内にない充実した内容がある．熱心な読者ならば，ＨＲ図のようなものを作ってみることもできよう．第Ⅵ章：近接連星の章は本書の圧巻である．近接連星を理解するための知識と，近年のトピックをならべて現代天文学の一面をかいまみさせてくれる．読者は，連星が関係することだけがわかっていて，ほんとのところは解かれていない問題が多いことに気がつくだろう．新聞で読んだニュースをも少し詳しく知りたい人にも役に立つ．最後の付章には，望遠鏡の話や国際協同観測の話などが簡単に述べられている．

天文学の本がふえてきた現在，たとえば連星というように限定した分野の本が出てくることはよいことと思う．また学校で習っていることをくりかえさないでもよいと思えば，はじめの３章を省いて，題も変えた方が羊頭狗肉の感がなくなる．あるいは大事な知識は，あとの話のなかの必要な個所に配分してもよいかもしれない．また，後の知識を仮定しないで前のところはわかるとか，拾い読みすることを考えると，やはり簡単な索引があると便利である．いくつか目についた不適当な表現やミスプリント（たとえば222頁の第20表ではａとｂがいれかわっている）のなおしとともに，次の機会に期待したいものである．

（近藤雅之）

宇宙と星99の謎

堀　源一郎著

（サンポウ・ブックス，新書判，242頁，550円）

空間の構造やその時間的進化には数多くの謎がひめられていて，そのどれ一つをとっても吾々を魅了せずにはおかぬものであり，生涯をかけて探究するに値するものである．そのような謎のなかから興味をひく99の項目について明解に解説されているのがこの本である．題名からは，少年の頃にいだく疑問を解き明かしてくれそうな本であるという印象を持つのであるが，その内容は，著者の宇宙に対する真摯な探究心と自然に対する敬虔な態度がただよっていて，著者の宇宙観を通して新しい宇宙の姿が眺められるようになっているので，ただ単に少年だけにとどまらず，本誌の読者層には恰好な本であると思われる．

内容は全部で11の章に分けられている．第１章は小学生がいだくような，素朴ではあるがしかし重要な疑問10項目をとりあげている．夜空は何故暗いかというオルバースのパラドックスをはじめ，地球はなぜまるいか，夜空の星のそのはるか彼方はどうなっているか，宇宙人は存在するのかなど，どの項目も一つの章としての内容をもつものであるが，それらの要諦のみをわかり易く一つの項目にまとめてある．第２章から第５章までは，太陽系，太陽，恒星，銀河系，大宇宙と，身近かな星から宇宙の果てにある星の順で，宇宙像がうかがえるようになって